日本語表現にみる日本人の意識

氏　家　洋　子

1.　標題について
2.　日本社会のいくつかの特徴
3.　日本人の表現意識
4.　日本語表現のいくつかの特徴
5.　文法要素レベルの問題

1.　標題について

まず，標題について論じる必要がある。「日本語表現にみる日本人の意識」とは抽象化して言えば「AにみるB」ということになる。A・Bの二者が問題にされているということがまずあるわけである。A・Bの二者を問題にする場合，「AとB」として単に並列的に置くこともできる。ここで「AにみるB」としたのは並列的に両者を論じようとする態度が根本にないからで，Aにはどのくらい B が見られるかというところから出発している。

それは，BがAにストレートに結びつく，Bがあればそれは必ずAとして顕現するという見方の否定を同時に含む。ここでAを取り上げ，それはこの日本語をもっとはっきりさせれば総称としての「日本語表現」であるから，より正確に言えば，いくつかのAを取り上げ，そこにB——同様に，いくつかのBを見ようというわけである。

この見方が同時に含んでいるものは，BがストレートにAとして顕現するのではないと先に述べた言い方が実は全否定なのではなく

すべてのBがストレートにAとして顕現するわけではない

という形で表わすことが妥当だということである。

しかし，また，A・B二者の関係だけでなく，さらにこれらを規制するものとして社会(外界)を考えると，これをCとするなら，Cもまたすべて Bに映るわけではないということを併せ考えておく必要がある。A・B・C 三者の関係については前回述べた[1]。

A・B二者の関係の特殊なあり方としての「AにみるB」ということになる。この場合「特殊」とは特定の方向性を含むということ。

2. 日本社会のいくつかの特徴

次に，具体的に日本社会について考えてみよう。と言っても，この時視点は前章のBを知らず知らずの内に侵蝕しているCとしての社会という点に注がれている。最終目的としての，Aに現われたBをみるためには，Cの側からもBにスポットをあててみることが必要になる。そのためにCを見ようとするのであるが，この時BからみたCという形で取捨選択がなされているであろうということは注意しておきたい。つまり，Bからみて関係あると思われる，網の目にひっかかったCのみに制約されているであろうということである。

Bに係わるCとしての日本社会の特徴について考える時，まず問題になるのが単一民族の社会であるということ。しかし，これはより正確には馴成単一社会[2]なのだと言わねばならない。日本列島が海流の関係から吹きだまり的地点にあり，その昔流されてきた人々が住みついてできあがっている部分があるということ[3]，そして，そうした馴成が可能であったということ。その後，一応民族・言語・文化共に単一ということでこの列島の社会は形成されてきた。単に単一社会ととらえるのでなく，歴史上の一定の時期に於て馴成と名付けられる部分をもっているということ，そして，それ

1) 「日本語にみる表現と意識」『講座日本語教育 10』74.7 早大語研。
2) 神島二郎『文明の考現学』東大出版会 71。
3) 「日本語と日本人の思考」『講座日本語教育 9』1973.7 で触れた。

が「奉る」によるソフトな政治支配の歴史をふんできたということを確認することは日本人の意識をおさえる上でも別の意味を持ってくるだろう。

次に，この列島が狩猟採取文化の時代から根栽農耕文化の発生を見，ここで縄文文化を生んで，次いでいよいよ水稲農耕文化の成立により定住社会となっていったことに目を向けてみよう。同じく穀物栽培でも米中心か麦中心かで文化の性質・集住のあり方が違うと言う。米は完全栄養で家畜は食用よりも役畜となり，動物性蛋白は日本では魚介類により摂取された。一方麦の方は不完全栄養で牧畜の共存が必要であり，少なくともそれとの交易が必要であった。こうした事情から，日本では水稲耕作を中心とした定住農耕文化の成立以後，米の栄養価の高さに依存して高密度社会が形成された[4]。

また，イネは連作が可能であるから定住性は著しい。ここでは閉鎖的地域社会が作られ，外に対しては排他的となり，内に対しては連帯感が要請される。協働が必要な社会であるから，個人の利害よりもグループ全体の利害を優先させる強制力としてもこの連帯感が機能するようになる。江戸時代の五人組制度に著しいように，自分の都合を犠牲にしても組織全体のために忠誠を捧げねばならないという掟が生まれ，これが義理の成立となる。ここにあっては個人主義の育つ余地がないと言われる[5]。

このことと関連して，日本人には能力平等観があると言われているということがある。日本社会の給与体系等が実力主義に基づかず学歴主義であるのは，「人間は本質的にみな同じ」という能力平等観の一つの現われ[6]というわけであるが，これなども個人の能力・利益を伸ばすことが徹底して行なわれることなく，協働で集団のために働いていた社会情勢（そしてそうしたことの影響もあって人を「あの人は頭がいい」とか「悪い」とかと固定的にとらえてしまう態度をも生み出しているが。）との関係をたちき

4) (2) に同じ。
5) 筑波常治『米食・肉食の文明』NHK ブックス 1969. 3。
6) 中根千枝『タテ社会の人間関係』講談社。

って論ずることはできないようである。

さらに，このことと根底の所で係わっていることでもあると思われるが，自然と人間の関係という問題がある。日本は湿潤な地帯で植物の繁茂に適し，地球上で最も植物の豊かな地域の一つであるという。衣服の材料や模様，また家屋内でも襖絵等々に自然がとりいれられているさまは，穏やかな自然に恵まれた人が自然を味方と考えていることの現われだとも言われる。たしかに欧米では衣服のデザイン等に植物がとりいれられる場合は左右相称の幾何学的なものであったり，花のみの部分だけであることが多く，同じくアジア内の隣国，韓国でも唐草模様とか，あるいは竜など動物の模様が多くあったという(1973 年度語研日本語研修 5014 クラスでの調査による)。それに比し，日本の和服では植物が自然にあるがままの形を生かして使われていることが多く，また，襖絵等も同様であるように思われる。

これに比べると，ヨーロッパの方は遙かに恵まれない風土をもち，更に日本のような島国馴成単一社会と違って，戦乱にあけくれてきた地域である。そこでは考え方の根底に自然も他人も何もかも，自分以外のものは悉く自分に敵対する存在だという厳しい思想が育まれ，強烈な個人主義の成立の前提になっている[7]。

だいたい以上のようなことが日本人の意識を考える上で係わりあると思われる，日本社会の特徴ということになる。

3. 日本人の表現意識

ここですぐに日本語表現に立入ることをせず，少し遠回りをして，こうした社会的特質と日本語表現との関係を考える上の橋渡し的意味で，日本人が「表現する」ということをどう考えていたかについて検討してみたい。表現された部分だけから日本人の意識をさぐることの限界を感じての

7) (5) に同じ。

ことでもあるが，また，表現された部分について考えるにあたっても日本人の表現意識をわきまえておいた方がより良い成果が得られるであろうと考えてのことである。

古今和歌集(905 年)序にみられる六歌仙評は個人批評の最初のものと言われる。紀貫之による仮名序には業平の歌を評して

ありはらのなりひらは，その心あまりて，ことばたらず。しぼめる花のいろなくて，にほひのこれるがごとし[8]

とある。業平の歌のこの集の代表的なものには

747 月やあらぬ春やむかしのはるならぬ我身ひとつはもとの身にしてがある。

この評にみられる「心余りてことばたらず」のような例は表現しようとする心が内にありながら十分にそれが表現しきれていないというもので文学の世界ならではの表現意識と読み取れる。

と言うのは，——と言ってもいささか「表現」のレベルが必然的にずれてくるのだが——一般に日常生活レベルでの日本人の表現意識はそのようなものとは趣を異にしている。一口に言えば上の例のような表現の不足をツイたものより，表現しない方がよいという考え方である。

まず，松尾芭蕉の発句篇，秋の部には

座右之銘

人の短をいふ事なかれ

己が長をとく事なかれ

物いへば唇寒し穐の風[9]

とある。この「唇寒し」とは「唇亡びて歯寒し」の成語をふまえると言われる。倫理的見地からみての表現に対する規制がうたわれているわけだが，これは「雉も鳴かずば撃たれまい」「言わぬが花」「沈黙は金」(「雄弁は銀」とはならず) などの諺と軌を一にしている。政治レベルから言えば

8) 岩波古典文学大系「古今和歌集」p. 100。
9) 岩波古典文学大系「芭蕉句集」p. 137，小文庫［泊船集］とある。

圧政の背景がたしかに感じられるものだが，芭蕉という個人の作成になるこの句の場合これを彼が座右の銘としているという点から日常生活レベルでの表現意識ということで考えてみると，人の悪口を口に出してしまいたい，普通の人間にある心理が一つ窺える。しかし，更に根底には日常会話において相手に気を許す話者の意識がまたそこに窺える。

そのことが単一社会という根底の上に協働社会・閉鎖社会・高密度社会として在った日本社会，そこに在る自己と他己との区別の截然としない日本人ということと符牒を合わせているということになるだろう。平ったく言えば家族的社会とも言える。そういう所で必然的に成立つ意識が必ず存在すればこそ，それを戒める心理が働いたということになるだろう。

次に，多少とも倫理感の強い人ならそのような戒めを自らに課すことが必要であったというような社会では，つまり，コミュニケーションの密度の高い社会（電話の普及率は西欧を越えてしまい，また当初から電話一台あたりの使用率はアメリカを凌ぎ，その3倍以上という[10]。）では心を通じ合わせるのにことばというものにそれほどの厳密さが要求されない。ことばに厳密な定義を与え話し合うということは我々において言わば頭のつきあいであり，心のつきあいは，つきあいの深まりに於てお互いに理解しあえるようになることであり，そこにあって説明とか定義とかというものはさして重視されない。ここに，いわゆる「以心伝心」の思想が生まれる。ここには先述の「人間はみな同じ」なる「能力平等観」が根底にあり，同じ人間なのだからお互いの間で意思は通じ合うはずだという考えになる。ここでは人間のつき合いの最高に理想的な形態を「以心伝心」とみなす感覚が発達している[11]。最終的にはことばなど使わずともそばにいるだけで互いの気持がわかりあえるという考え方である。

「以心伝心」そのものは仏教から出たものであろうし，また，欧米人にした所で，特に恋愛感情など，生に通じるという意味で真剣な強いものの場

10) (2) に同じ。
11) (5) に同じ。

合，同じことに価値をおいているということはある。しかし，日本における場合，これを至上のものとみなす感覚が「コツ」の重視に見られるような，表現に努力せず，表現に価値を置かないということと軌を一にしているということに目を向けねばならない。「雄弁は銀」とはならず，「不言実行」に価値がおかれ，かくて「男は黙って××ビール」というCMが我々の或る種の美意識に合致する形で入りこんでくるというしくみができあがっている。

たしかに同質者の協働社会という点から考えると，以心伝心は可能なことでもあり，また必要なことでもあったろう。「気が利く」という語は相手の心理を読み，相手の望むように行動することである。この語に価値がおかれ，さらに，

このデザインはなかなか気が利いている

のように自分の価値観に合うもの，好みに合うものを評するのに相手（デザインの作り手）が自分の心を読んだというのと同じ意味の語が使われていったことは興味深い。

文学者の手になる名文を読んで，一言「うーん，いいですねえ」とうなってあとは無言で目をとじるだけの先生の講義が名講義と言われたことも，それを受講する学生がその教師の一言に集約されるような感情を共に持ち得た(あるいはそう解釈した)からにほかならない。自己と他己の区別がはっきりしている社会であったら，どういいのか説明することが必要となるだろう。

日本語の文章は指示代名詞が多用されていると言われ，また，文の途中で動作の為手が一々明示されないなどということも「同質者の協働社会」という性格が日本語社会の特質として残っているからであろうと思われる。

先にちょっと触れた「コツ」であるが，これは翻訳しにくい語だという[12]。日本社会で，ことばによる説明を拒否することにつながるコツの会

12) 村上陽一郎「勤勉の思想は科学をはばむ」『マイウエイ』69.1。

得が重視されている，コツという語がよく使われるということは徒弟修業とか篤農技術の発達につながることであり，従って科学の不発達ということに通じる。言語による知識の伝達が重視されず，個人的つき合いが深まらなければ，と情の次元が知の次元に迄持込まれていた結果，言語化すること，つまり，一般法則として理論化するということの発達が遅れた。師匠の生活の追体験により師匠の感情への共感度を深め，核心のコツを会得するという方向に進んだ。修業の内容によっては体得が重要な要素を占めるものがあるわけだが，欧米におけるような他己と自己の意識にあってもともとわからない相手にわからせる手段がことばであると考え，明確な定義を語に与えていった[13]のとは大きな開きがある。日本では学問すらが，先述の「古今集」序の六歌仙評に始まる譬諭の形をとって江戸期まで来ており，今日それを解釈するには当代の解説書・注釈書を媒介にすることが必要になっている。

ヨーロッパでも大工のような職種にあっては実践が重視され，ことばによる伝達が明確な定義を以て行なわれたという点は影をひそめてくるようだが，日本の場合，体得が重視されたのは単に技術の伝承だけでなく，抽象的な人世観・世界観も正しく伝達するにはこれが必要とされたという事情がある。このようにみてくると日本人の表現観にみられる言語表現の不足は東洋的な，総合的なものを会得しようとする価値観・意識に結びついていることになる。

こうした流れが主流を占めていたとすれば，そんな中で異質なものが擡頭してきたと見られるのが言語過程説における伝達論に見られる言語表現意識である。

言語過程説は言語を表現・理解の過程・行為ととらえるものであるが，ここにあっては伝達というものについて，理想的な伝達はあり得ないという見方になっている。その主な理由は二つあり，一つは言語というものが

13) (5) に同じ。

表現の素材である個物を個物として表現するものではなく，概念的認識を通して一般化して表現するものだからということである。私の部屋を知らない人に私がことばをつくして自分の部屋について説明しても聞き手が頭に描いた内容と私の部屋の実状とはかなりかけ離れているのが普通であろう。話し手に属する所に於ても具体的事物を概念化する働きがなされており，これが音声化・文字化のプロセスを経て聞き手の目・耳に触れ，受け取った音声・文字で聞き手はそれに対する概念化を行い，具体的事物を頭に浮かべるという経過が考えられる[14]。ここでは，話手から思想そのものが受け渡されるというような安易な伝達論は考えられていない。

もう一つ，伝達が困難な理由は表現に於て意味作用が行われているということである。個物を，それに対する把握の仕方に於て表現しているということであり，話し手の特殊な状況・立場・場面に制約されてそれなりの把握の仕方が行なわれ表現される[15]。

こうした点を厳然と見据えて言語表現を考察した時枝誠記氏は普通に日本人が伝達を安易にみなしていたという土壌の中では極めて異質な存在であったと言える。

4. 日本語表現のいくつかの特徴

具体的な日本語表現そのものに入っていこうと思うが，まず日本人の受答えには或る特徴があるのではないかと思われる。その一つは「そうですか」というものであり，英語で話している時うっかりこの口癖が出ると，直訳して "Is that so?" などと言ってしまいがちだが，これは相手の言明に疑問を感じた時の言であり，言わば「そうなの?」「本当にそうなんですか」にあたるようなものであるということは大変な隔絶である。

英語の会話を聞いていると，即座に "Fine!" とか "Lovely!" と言って反応しているケースが多い。フランス語の会話を試みた時も，「そうで

14) 時枝誠記「国語学原論　続篇」1950。
15) 時枝誠記「国語学原論」1941。

すか」とまず受身で相手の話を聞く習慣がぬけず，「この場合何て言うのでしょう?」と尋ねねばならなかった。しばらく考えてフランス人の夫婦は「“Ah, oui?”がいいでしょう。」と言ったが，「そうですか」の形はそのままにはないということになる。パーソナリティー等で日本人と言えども多用する人とそうでない人とがいようが，相手の話をよく聞き，一々それに対して聞いているという合図を送る（日本人が受話器を片手にしきりにうなづいているさまは欧米人にとって奇異に映るという）習性はたしかに日本人が著しくもっているものである。

これに対し，受身の発信を余り送らない人々の態度は，常に自己と他己とが区別され，自分の意見を主張することに価値があり，またそうすることが必要であった人々ということとの関係が切り離しては考えられない。

「そう言えばそうですね」などは，単に「そうですか」以上に，相手との同化を行っている姿である。相手の言に対し，そういう言い方をすればたしかにそうなるということで，「そうですね」という，相手の言に対する賛意を求める余り，相手の土俵にあがりこみ，それ自体を肯定していくという態度である。後に，こうした表現の形が利用されて，必ずしも同意しているのではないが，この表現を使うということは生まれたが，それは直接ここで問題にしなくてもよいだろう。

次に，受給(やりもらい)表現が多用されていることも一つの特徴ではないだろうか。特に，相手に向かって言う時はこの人間関係をとり入れた語を一緒に使わず表現するときわめて奇異な感じになる。留学生が時折，

先生，食べなさい

台湾にいらっしゃい。

などと言うが，これは「食べて下さい」「いらして下さい」として，極言すれば「私のために」という人間関係を表わす語がかげに隠れて寄り添っている表現——依頼形になるが——を使うのが普通である。親が子供に言うのならいざ知らず，それの除かれた表現は或る意味で人間関係を構成し得ない，従って，日本語の表現として不十分ということになる。

「憂鬱の原因? ～じゃないのよ。～が決まらないの。」

「それなら婦人 LL のみはるにいらっしゃい。」(740626)

という CM が流れて来れば耳にひっかかる。特に命令の形の場合,「～して下さい」という「私のために」が裏にひそんでいる形を使わないと,全く一方的な単なる命令になってしまう。

そうした場合だけでなく,

彼は私に本を送ってくれた

教えてさしあげましょう

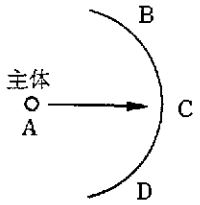
などと言うべき時に,英語国民に関して気付く機会が多かったが,人間関係を示す受給表現を使わず,単に「彼」「私」の行為としての動詞のみで表わしてしまうことがあるが,そうした人間・人間関係不在の言語表現はあまりなされないようである。英語の場合

Betty sent a book *to me*.

Won't you go to the bank *for me*?

のように to me, for me が顕現していると,あえて「私に」の意がはっきり示されているのだと解釈できるわけだが,日本語の場合は取り立ててそれを示すことは不要である。補助動詞として用いた受給表現の中に既にそれが含まれているからであり,こうしてかなり執拗に人間関係が意識されており,それがことばの上にも反映されていると見ることができる。

次に考えたいのは,「と思う」という言い方の問題である。この語の出現には当然のこととして,その,「思う」主体が備わっている。この語を使う所にある構造について考えてみると,まず,比較になるのが,「あの鳥は赤い」という言い方である。これは Husserl, Edmund (1859–1938)



の現象学に於て図示される noema (対象面)・noesis (志向作用) に於てA～Dのように番号をふると，対象面となる BD に対する志向作用 AC があって表現の基礎ができあがる。「あの鳥は赤い」は言わば叙景文とも言えるもので，BD の世界を表現したものとして，

BD—AC

なる構造をもつものとみなされる。

ところが，これに対し，「あの人は美しい」のような文の場合，叙景文とは言い難く，主情文とでも言いたい，主観の表明を主とした表現になっている。その場合，この語の構造は

BD—AC—A

ということになる。この最後の A を明示しようとしたものが，「と思う」に他ならないのではないか。日本人は「と思う」を頻繁に使うと言われるが，或る意味ではこうした意識の構造の違いを明確に感じ取っての正確な表現と言うことができる。

必要なのに使わない場合は「決めつけ」となる。

水が飲みたい

のように言語表現自体の中に，「A」が内蔵されている場合は「と思う」は不要であり，使えば，「たい」と欲している自分を客体化した理性の働きが感じ取られる表現となる。

ところで，英語にも I think はごく普通の使い方としてあるようである。それと日本語の「と思う」とが相当するとかしないとかということは一口には言えない。同じ英国人でも I think を頻用する人としない人とがいるようだが，前者の場合，私がそう判断するのは，その人が自分の意見を述べねばならない立場，また場面によくあるということにもよるだろう。その一人の例として James E. Fegan 氏がいるが，氏によれば，I think を頻用するのは中流以上の教育を受けた人間の場合に多いという。

米国の場合は，そうした区別なく多く使うということも聞かれ (Nancy Morison 夫人による)，また，面白い例として，日系2世の米人と日本人

との間に生まれ，日英両語の中で育った2人の留学生が，寄宿先の日本人の日常使う「と私は思います」の言い方に自己主張・利己主義を感じると揃って言ったのは印象的であった。

一方には

テレビ14日「アフタヌーンショー」で，電話での質問に対する藤原弘達氏のバカ呼ばわりの答えに怒りをおぼえた。たしかに，灯油，ちり紙などの買いあさりで，あとに残った物価高という結果は主婦たちのいけない点である。でも，どんな人でも意見を持っており，これまでは同氏の考えに共感をもっていたが，この暴言は許せない。そして同氏と，われわれ庶民の間に距離ができたことを痛感する。

という意見もあり，私も「と思う」の表明は自分の述べたことについてこれは自分の意見にすぎないということを明らかにするものだと思っていたので自己主張なる評にはいささかめんくらった。

しかし，「自分の意見にすぎない」という言い方が既に曲者で，思うに欧米の自我と日本のそれとは大いに異なり，その故に日本では「と思う」が謙譲性となったのではないか。

もっともその寄宿先の日本人がいかなる内容の話に添えて「と私は思う」と言うのかも問題になる。そこから利己主義を感じ取ったということも考えられるからである。つまり，自我の強弱という問題は I think と「と思う」との比較を考えるにあたっての一つの踏み石であり，比較対照しようとする態度に既に問題が存しているかもしれないということもありうるわけである。つまり，各々英語・日本語でその一語にまとめられるからと言ってその語をまな板にのせたところで，現実の発話の場面では

これは私の意見にすぎませんが...

と消え入るように言うような内実のものである場合もあり，

私がそう考えるのです

これが私の意見です

として，強く主張されたいような，英語でもIに強いストレスがおかれて

発音されるような，そんな内実の場合もあるからである。

次に含過程構造については前回一部述べた。「やっぱり」「さすが」などの副詞に単語でありながら文に相当するプロセスが含まれているとしたのであるが，私がここに入れるものは他に感動語，客観的論理を示すのでなく，前文(部)で述べたことに対し，後文(部)で分化した形で行うものとの関係づけをする，相対的に未分化なものとしておさえる接続語[16]，それに統続助詞というものである。

ここでは日本語の特徴ということで統続助詞にしぼって考えてみたい。

彼がおこっているのをみて驚いた

における「の」は「彼がおこっている」全体を受け，まとめて，次の「を」に続ける働きをしている。これを統続助詞[17]と名付けるもので，「のに」「ので」なども実は同じであって，「の—に」「の—で」と考えるべきものである。このうち，一般に終助詞とされている

雨が降っているの?

などは

雨が降っているんですか?

の後部省略形であり，このいずれもが，「雨が降っている」を直接の情報内容とせず，問題となるその内容は既にあり，それを今発言する際にそういう事情かと聞いている，つまり，発言に際してその時迄にある事情ができあがっているということになる。

たばこ，いかがですか?

いいえ，結構です。たばこはきらいなんです

のようなスィテュエーションを与えると外国人にもわかり易いようで，また，

とてもこのお料理おいしかったわ。

という情報を受け，それがわかっていると

16) 「関係づけ表現としての接続語」『早大語研紀要 11』74. 3。
17) 「文論的考察による統続助詞『の』の設定」『国文学研究』69. 12。

おいしかったんならまた作ってあげましょう

の形が出るなどとすることも有効である。

It is in the circumstances that...

は一つの説明の手段になるが現実に英米人がこの構文を使うことは多くないようだから相当語とは言い難い。

5. 文法要素レベルの問題

以上の考察は，日本語表現のいくつかの特徴をとりあげ，日本人の意識との関係をさぐったものであるが，この場合，日本語表現とは，言いまわしと言い直すこともできるような，言語単位として見れば熟した大まかなものであった。そして，現代語であり，現代日本人としての内省をきかせることが可能であるものばかりであった。

今，ここに主に社会学的・文化人類学的視点から日本人の行動様式に他律的なる結論を出した人がいて，その傍証事項として，文法単位中の或る部分を持って来て，次のように説明したらどうであろうか[18]。

不肖，私はこのたび村長に選ばれまして...

というような受身の形を使う発語者の心のあり方は自らの意志・能力による行動というものを認めず，集団ないしは他に動かすものがあり，それによって自らの地位が与えられたという考え方を取っているということであり，また，そういう自己認識が他から歓迎されるが故に使われるという。

しかし，選挙のような形をとっている以上，

人が私を村長に選んだ

と言うか，また，「私」を中心に言おうとするなら，

私は村長に選ばれた

と言うしかない。この場合受身の形を避けようとするなら，

私は村長になった

18) 荒木博之「日本人の行動様式」講談社 73.5。

となる。しかし，「なる」についても，この論理は，木に果物が自然になるようなもので人力以上のものを他に認めた表現という解釈が既に同様になされている。

自らの意志による場合であっても，

私は今教師でない

という事実があり，しばらく時間が流れて，後，

私は今教師である

ということになったら

私は教師になった

と言わざるを得ない。表現しようとする内容は，言わばカプセルのようなもの(形式)に入れて表わさなければ人には通じない。そのカプセル自体は少なくとも一時代以上前に作られたものであるという宿命を言語は持っている。にも拘らず，そのカプセルの語源をさして，日本人の考え方はこのようであると論じるのはどんなものであろうか。

考えまいと思っても彼女のことばかり考えられてならなかった

とか

ここにこうして坐っていると昔のことが思い出されてならない

などにおいて，

「考える」あるいは「思い出す」主体は発語者であるにもかかわらず，発語者の意志というものはほとんど否定されてしまっている。

なる叙述があるのはどうにも承服しかねる。この論述が出てくるのは自発について，

自発が主体の意志や能力によらずに動作，作用が自然に実現されることを指示するものであるとするならば，それはやはり「主体の放棄」という意味においてまさしく集団論理的，他律的であるということができる。

という規定をしているが故にであるが，なぜこの論者にあっては常に人間に関するあらゆることが主体の意志や能力によらねばならぬと考えられて

いるのか，そして，その故に，それによらないものは全て否定的にとらえられていることの理由が理解できない。

無意識の裡に行なわれていたことが意識下に浮かび上がってくるというような微妙な心の動きがこうした日本語ではよくとらえられているということこそできようが，いわゆる受身・自発・可能・尊敬の「(ら)れる」を使うと，全て他律的日本人の考え方というレッテルを貼られるというしくみはなんとも理解できない。

逆に

I coud not get to sleep for a long while last night.

と言えば，このI can get の形式の故に主体的な働きがあるということになるわけだろうが，これは

Sleep did not come (to me) till late last night.

の意であると言うこともできるわけである。

言語単位として，カプセルとして働いているものに関し，語源的考察により日本人の考え方の反映として律していこうとするなら，永遠に日本人は他律的とよばれ続けなければならない。

では，次に，同じく文法要素レベルと言っても今見たようなものと違い，何にでもつきうるという意味で独立性をもった助詞の場合について考えてみたい。「れる」の場合は動詞について使われるものであるためか，その語独自の発展をみることがなかった。

ここで取り上げる助詞「は」は他の多くの助詞と同様，感動語的なものから次第に日本語が論理を獲得していく中で格表示その他に使われていったものの一つであるが，日本語表現の特徴をこの「は」の使用を除いて論じることは不可能と言うべきだろう。

一般に

私は学生です

の「は」は主語を表わす等とされていることが多いが，そういう言い方は欧米語を下敷とし，それを基準にして該当するものをあてはめていくやり

方と言わねばならない。

そこにはありません。

のような，明らかに「主語表示」でないものも，また，

そこへ行ってはいけません。

等「てはいけない」で熟している形も，すべて，提示部表示ということで一括できるし，また，それが妥当なのではないかと思う。

定期券をはっきりお見せ下さい。

セルフサービスですからお茶を御自由にお飲み下さい。

大森実の東京オブザーバーを販売しています。

などの例が，それぞれのスィテュエーションに於ておかしい[19]こと，及び，にも拘らず，こうした表示がなされているのは表示者にとってスィテュエーションは自明のことであり，それを前提にそこで自分の言いたいことのみを言ったからということになるだろう。

日本語でこの「は」が頻用されても外国人にとって

その公園は桜が有名です

の「は」をたとえば英米人に As for だと説明すると，おおよそのところはわかるようだが，As for 自体が日本語の「は」と同様に使われるものでも勿論なければ，また，頻用されるということもないためにピタッと来ないわけで難しく感じるらしい。勿論これは「は」としてわからせる以外方法はなく，日本語を使うことと聞くことに慣れる以外そこに道はないだろう。しかし，単に慣れよというのではなく，日本語自体の分析をする者がこうしたポイントをおさえた上で説明するなり慣れさせたりすることが必要とされよう。

74. 7. 23

19) 「現代語の文の構造における一傾向」『文芸と批評』67. 6。